巻 頭 言

大阪医科大学看護学部 教授　道重文子
Fumiko Michishige

本雑誌は，大阪医科大学看護学部における教員等の研究成果を広く看護界に発信し，看護学の向上と発展に寄与することを目的として，看護学部が開設された年度に創刊され，この度，第9巻が発刊されました。

年々，多数の論文が投稿されていますが原著が少ない状況です。本巻掲載の15編の論文においても原著1編，研究報告2編でした。

2018年度のノーベル医学・生理学賞を受賞された分子生物学者の本庶佑さんの研究哲学は，「一番大事なことは，自分が何が知りたいか，いつも意識している。そこに自分のエネルギーをなるべく向けるべきであって，何ができるかということに逃げない」ことであり，研究室のメンバーに6つのC“好奇心（Curiosity）を大切に，勇気（Courage）をもって困難な問題に挑戦（Challenge）し，必ずできるという確信（Confidence）をもち，全精力を集中（Concentration）させ，あきらめずに継続（Continuation）することで，時代を変革するような研究を発信することができるのです”というのを常々おっしゃっていたそうです。

2014年にオプジーボが販売開始されるまでの道程は，1992年に謎の遺伝子が作るたんぱく質PD-1を発見し，1999年にPD-1が「免疫のブレーキ」の可能性浮上，2002年にがん治療の可能性，2006年に薬の臨床試験が開始され製品化されました。普通の人であれば諦めてしまうところを，先生は本当に諦めないで，粘り強く，この薬が実現するような方法がないか考えて挑戦を続けられたそうです。それは，「ノーベル賞をもらうことが人生の目標ではなく，患者さんの命を救えたということが大きな喜びであった」と語られています。“ナンバーワンではなくオンリーワンなれ”という言葉にまさに研究へ“6つのC”の意図が示されています。

研究結果が，活用や実用をされたり，知識の体系化に影響するものばかりではありません。しかし，自分がなぜ研究しているのか，そしてそれ使って何をしたいのかという研究の目標をもつことの重要性を考えさせられました。

看護学の研究では，それは研究なのか勉強なのか，業務改善なのかが問われることが度々あります。すでにわかっていることを学ぶだけなら勉強にとどまりますが，複数の文献や書籍を勉強し，それを整理や分類する文献検討から関連要因等を明らかにすることは，新たな知の創出に応用できます。また，ある場所のある業務改善を実践報告として報告すれば，他の看護師が実践に活用できます。これらのスタートも「好奇心」から始まり，継続することにより知の創出や看護の質改善となり人の役に立つ研究に発展していくことでしょう。本雑誌の資料として発表された研究が継続され，原著の研究として報告されることを期待しています。